

特集「最近の浜松医大を考える」を発行するにあたり

浜松医科大学同窓会々長 鈴木昌文(1期生)

何日も真夏日の続いた8月が、そろそろ終わり、蟬の声は熊蟬にひぐらしが混じり、夜、庭で鳴く虫の音は、こおろぎやキリギリスから、主役はスズムシに移り変わる季節になろうとしています。

同窓会会員諸氏におかれては、いくつかの本学をめぐる事件のほとぼりもようやくさめ、落ち着いた日々をお過ごしのことと存じます。この時期に、敢えて本誌特集「最近の浜松医大を考える」を発行する目的、編集の経過を説明させていただきます。

この編集方針を決定したのは、本年4月末の評議員会においてでした。前々回、前回の同窓会誌では、会の発足10周年記念として、県内各病院の院長先生に、アンケート並びに原稿を寄せて頂き、また、会員諸氏には、主に卒業研修に関するアンケートにご協力頂き、それらの結果を2度にわたって掲載しました。これらを、第一期生の卒業以来10年の締めくくりとし、これをもとに今後の10年を考えていこうと意図した訳でしたが、その矢先に残念な事件が発生いたしました。

同窓会とはまだまだ名ばかりの、会員諸氏の連絡係のような本会ですが、年一度の会誌を発行している以上、その内容を、一連の事件の存在を顧みないわけにはゆかないというのが、役員の共通した認識でした。しかし、そうなると、どのような内容にし、何を主張すべきかが、きわめて重大な問題となってきました。そこでいろいろ議論を重ねた結果、同窓会誌を、本学関係者全体の自由な討議の場として提供することになりました。

些か受動的な編集方針の決定でしたが、本学の中でこのような意見交換の場を設けることには2つの積極的な意味があると思われまます。

第一は、学外の目を意識することなく、私たち自身の問題を語り合えるということです。

第二は、学内に限定していますが、半ば公の場で事件の意義をはじめとする本学の様々な問題について論じあえる機会がこれが最初であり、またセンセーショナルな時期を過ぎたことにより、冷静な論議が期待できることです。

このようにして、原稿の内容は、事件にとどまらず、本学全体のかかえる内面的、精神的な問題に及ぶことを期待しつつ、6月から7月中旬の約一ヵ月間、学内全体に向け、「最近の浜松医大を考える」をテーマに、原稿を募集しました。また、現在までに本学で教鞭をとられた先生がたにも、原稿を募集する旨を連絡しました。時間や経済的な問題により、学外におられる会員諸氏には原稿募集の連絡はゆきわたっていなかったことについては、お詫びしなければなりません。本誌発行後に、投稿のご希望があれば、Supplementの発行を検討するつもりですので、ご容赦願います。

以上のような経過で、今回の特集号が発行される運びとなりました。ご覧のように、それぞれの先生がたが、それぞれの立場から貴重なご意見を述べられており、同窓生に対する深い愛情を感じずにはられません。大変お忙しい中を、執筆して頂いた先生がたに、心よりお礼申し上げますと共に、投稿されなかったものの、いろいろご配慮して下さった先生がたにも、深くお礼申し上げます。

また、惜しむらくは、卒業生及び学生会員諸氏からの投稿が少なかったのですが、おそらく、時間的余裕があれば投稿されたであろう会員も少なくなかったはずです。この機会に、私たち自身を顧み、二十一世紀に向けての十年を、より実り多いものにしようではありませんか。